

賞金稼ぎの平均寿命は30・5歳だそうだ。

今年度のバウチ調べなどでどこまで信用できるか怪しいネタだが、体感としちゃ説得力ある。文句なしに短命の業界だ。

殺るか殺られるかタマのとりあいが日常化した世界じゃ馬鹿とマヌケと弱いものからどんどん死んでく、生き残りたきや強いものに巻かれるだけじゃだめだ、頭がキレなきややっていけねえ。

世間じや賞金稼ぎは花形職業なんだ持て囃されるが俺に言わせりや厄介払いのお題目、まともな職に就けねえ半端者の受け皿だ。

いや、実態は蟲毒に近い。手の付けられないはみだし者を殺し合わせて、生き残ったヤツだけ富と名誉を勝ち取るんだから。

「ああんッあアあッひあッやッあアアアアんあッ！」

薄暗い部屋で全裸の女が喘ぐ。

札束の海に溺れてもがく。

「ちきしようやめろ、とつとと離れろー！」

ベッドの前に押さえ付けられ、突っ伏した男も泣く。

当たり前だ、駆け落ち相手が他の男に犯される一部始終を手も足も出せず見せ付けられてるのだ、舌を噛み切つて死

ぬ度胸がありやとつくにやつてる。

「ひあつやつもうやめて、死ぬ、死んじやうウ」

「見せ付けてんだよ、じやなきやお仕置きになんねーんだろ」

全裸の女を組み敷きぶち込むのは三十路の男。嗜虐に舌舐めずりして腰を叩きこむ、覗いた舌の先端は二股に分かれてる。

周囲の部下たちは一様に呆れ顔だ。

「もう何発目だよ」

「相変わらず絶倫だな。オンナに同情するぜ」

「しつ聞こえたらこつちまで飛び火する」

「俺ア野郎に同情するぜ、てめえの女がヒイヒイ言わされるの目と鼻の先で見せ付けられてよ。生殺しだ」

「男のプライドはずたただな。しかもあの巨根」

「同情つたつてお前しつかりやるこたやつてんじやねえか、ケツにぶちこんでさ」

「テメエだつて上と下の口でさんぎ愉しんだじやねえか」

「太つ腹だぜ、最初に味見させてくれるなんてよ」

「お前らの汚濁のあとに突っ込むなんぎ気がしれねえ、潔癖な俺にやとても無理な話よ」

「だから口だけでガマンしたつてか」

「一旦おつばじめると蛇のようにねちっこいかな呉哥哥ワケイゴ

は。待つてたら萎えちまうよ」

立ちんぼ見物にも飽きたのか、悪趣味なシャツをおもいおもいに着崩し、ゴツイチエーンネックスや指輪で見栄はる部下どもが噂話に興じる。

ベットに飛び乗つて、気の毒な女を犯しまくる男を見る目には紛れもない恐怖の色。

よく見りや呉哥哥とよばれる男の肌はのつべりした灰緑で、爬虫類じみた鱗に覆われている。

その鱗は右頬にまで及び、表情を浸蝕して酷薄な印象を際立てる。

強姦でおつ勃てる趣味はねえ。

目を閉じてえ。耳を塞ぎてえ。この場から逃げ出してえ。

許されるもんならとつくにやつてる、それができたら苦勞しねえ。

目の当たりにする女の痴態はいやなことを思い出させる。

せりあがる胃液をやり過ごそうと視線を巡らせ状況の再把握。

後ろ手掴まれて這い蹲るチンピラは満身創痍、片目は倍ほどこに腫れ塞がってすっかり人相が変わつてる。

もとは結構な色男だった。軽薄に脱色した頭髮と耳朵のピ

アス、いかにも女が好みそうな垢抜けて軟弱な風貌だが、組織の金庫から金を盗んでトンスラと、大それたことをしでかすだけの根性がある。

したたか袋叩きにされ、叩き折られてひん曲がつた鼻から、粘っこい血がたれおちる。

「馬鹿なヤツだぜ、兄貴分の女と駆け落ちなんて」

「どつちが先に言い寄つたんだ？ 野郎かスケか……同時に一目惚れつてこたアねーだろ」

「呉哥哥がお付きを命じたんだとき、オンナは何かと物入りだ、遊山に荷物持ちは必要だろ？」

「それがきっかけか。呉哥哥の愛人に手え出すなんて殆ど自殺じゃねーか、おつかねエ」

「おかげで役得に預かれたがよ」
タネをあかせばよくある話。

幹部の愛人を寝取り、カネを持ち逃げしたチンピラが、逃亡先の安宿で捕まって仕置きされてる。

現場に踏み込んだ時、おさかなことに真つ最中だった。全裸の男と女を見た呉哥哥は、開口一番「都合がいいや」とのたまった。

腕がす手間が省けると。

「ほらっイケよっイチちまえ」

「あああッあああああッひああアああアああんっ!!」

「愛しの彼が物欲しそうに見てるぜ。挟り込むように腰使われんの好きだったろ、アイツにもやらせたのか？ はは、目エギリならさせて……ませてほしいの？ だつたら泣いて頼めば考えてやる、一緒に挟んで鬨ろうぜ、それともテメエが挟まれたい？」

「離せ、てめえだけはブチ殺す!!」

何時間続くんだこの茶番。いい加減ウンザリしてきた。猛烈に煙草が喫いてえが、勝手なまねは許されねえ。

周囲の部下連が、ベッドの上で乱れる女と、床に転がる男に揶揄と嘲弄を浴びせる。

「コイツらも馬鹿だぜ、とつとと街からでりやよかつたのに」

「しつぱりやつてるとこ踏み込まれてよ」

「お楽しみかまけて自滅たア目もあてらんねえ」

俺達はチンピラの見張りと呉哥哥のお楽しみの見届け役を兼ねてる。

見物人は多い方が興が乗るとは呉哥哥の持論だ。

連中がかつぱらつた札束をベッドに撒いたのは呉哥哥の酔狂だ、そんなに金が好きなら金の上で犯してやれ、と。

毎度ながらケレンミたっぷり演劇がお好みだ、控えめに

言つて反吐が出る。

呉哥哥はズボンを寛げ服を着たまま。

かたや女は一糸纏わぬ全裸で全身白い汚濁に塗れている。目は既に虚ろで正気を失いかけている。

呉哥哥の本番前に、俺を除く全員に輪姦されたのだ。陰部と肛門は切れて血が滴り、弛緩しきつて赤い傷口を見せている。

よくある話。

ギャングを裏切つた悪女の末路としちゃ平凡すぎる。

少なくとも顔まで破壊されてねえのは慈悲だ。ひとえに萎えるからだ、サ、デイストこじらせた中には鼻を削いで晒し者にする鬼畜外道もいる。

ベッドが今にも壊れそうに軋み、女が生白い喉仰け反らせ絶叫。

紙幣が派手に飛び散つて俺の爪先まで降つてくる。

今ならくすねてもバレねえか？

ちよつとだけ出来心が働くも、震える右手を左手で押さえ、辛うじて誘惑を突っぱねる。

肉と肉がぶつかる乾いた音が響き、二人分の汗が飛び散る。「札束の海で抱かれんなら本望だろ？ 言つてたもんな、

一生に一度でいいから紙幣を敷き詰めたベッドで寝てみてえって。いや、札幌の風呂だっけ……どっちでもいいか、似たようなもんだろう。ああ礼はいいぜ、オンナの夢を叶えてやるのも男の甲斐性だ。さすがだろ、バブリーでゴージャスな俺様ちゃんに惚れ直したか？」

稚気すら感じさせる底抜けに陽気な表情と、行動がまるで釣り合わない。

横の男がぼそりと呟く。

「突っこみ以外にオンナを痛め付けねえのが呉哥哥の数少ねえ美点だな」

全面的に同意だ。

「美点」の表現が正しいか否かは保留として。

「残念だな。結構気に入ってたんだぜ、俺様ちゃん好みに仕込んだカラダ」

愛人だった女を乱暴にかき抱き、華奢な首筋に、優美な鎖骨のふくらみや豊満な乳房に、体中至る所に噛み付く。

嘗て可愛がったオンナに、キズモノになった玩具程度の関心しか示さず。

女の顔が苦痛に歪み、血が滲んだ痛々しい歯型が柔肌に無数に刻まれていく。

俺は呉哥哥の横顔だけ見ていた。

そうすりゃ女の苦悶やチンピラの悲嘆を見ない言い訳が通

る。

第一印象は、蛇だ。灰緑の肌も皮膚に浮かび上がる鱗も、冷血な爬虫類をおもわせる。シヨッキングピンクに染めた頭髮と黒いサングラスがひどくちぐはぐだ。

「おねがい許して、なんでもするから……ひッ……命だけは……」

女が恐れ慄いて許しを乞い、呉哥哥が気まぐれに問い返す。

「なんでもって？」

「なんでもよ、なんでも……クスリ漬けにされて場末の娼館に落とされたっついい、街からでてけつていうならそうする、ふあッ、またあなたの女に……もどらせてもらえるとは思わないけど、ひあァんッ、どんな恥ずかしい奉仕だつてするから……許して、出来心だったの、本気じゃなかったのよ……」

自分に……正しくは自分のカラダにはまだ利用価値があると信じて疑わない女が喘ぎ声の合間にたどたどしく哀訴し、間男が愕然とする。

これだから女はおつかねえ。

裏切りを重ねて自分だけ生き残ろうとする、エゴのかたまりだ。

気の毒なチンピラが唇をわななかせる。

「は、話が違うじゃねえか……俺のこと愛してると言つたよな、この街をでてふたりでやり直そうって、あんたとならでできるって」

「陳腐な寝物語よ、真に受ける方がイカレてる。アンタがとち狂って実行するから後に引けなくなつたの、全部アンタのせいよ！ 死ぬなら一人で勝手に死にな、私まで巻き込むな！」

「お前が手引きしたんじゃねえか、見張りの薄い時間を吹き込んで」

「は？ 証拠は？ 実行犯はアンタでしょ、私は何もしてない。こんなヤツの言うこと信じちゃダメ全部でたらめよ、私が呉哥哥を裏切るわけじゃないじゃない、本当に愛してるのはあなただけ……」

「くそつたれ！ がばがばの売女が！ 俺のがイイって言ったじゃねえか、あの人は強引すぎてイケねえって……ハメたのか？ そうなのか？ 最初から捨て駒に……なめやがつて、全員ぶつ殺してやる……！」

「ねえ本気にしたんじゃないでしょ、いままでどんなに尽くしてきたか覚えてるでしょ、死にかけた時は付きつきりで看病して……ああ呉哥哥、やつぱり最高。他のヤツなんかメじゃないわ、本当に惚れてるのはあなただけよ……」

ハメて嵌めたオンナが卑屈に媚びる。
ハメて嵌められたチンピラが泣き喚く。

ハメてハメられハメ返す、それがこの世の円環の理か……
諸行無常だ。

滑稽でしかない痴話喧嘩を延々繰り広げる男と女。

互いに罪を擦り付け合い、罵り、貶し、安っぽい愁嘆場が見苦しい修羅場へ連れこむ。

盛大にばら撒かれた紙幣がなだれ、地獄の沙汰も金次第な阿鼻叫喚を呈す。

喘ぎがもう一段高まり、女が背中を撓らせてよがり、呉哥哥がラストスパートに突入。

シヨッキングピンクに染めたベリーショートの下、どんな時でも外さない黒いサングラスの奥で、獐悪に切れあがったまなじりがほくそえむ。

『好』

痛快げに呟き、耳まで裂けるような笑みを広げる。

「じゃあ臓器抜いて売ってもいいか」

「え……」

女の顔が固まる。

「マツドの得意先に献体として納品しても？ 汚染区域で何日耐えられるか放り込んで試しても？ カニバルの変態にグラムで切り売りしても？ お前の脂肪からできた石鹸セールスしても？」

「や、それは」

「スカトロ好きの年寄りに売りや三食糞便のフルコースだ」

「本気じゃないんでしょ？」

「なんでもじゃねーのか。その程度の覚悟か」

女として使い道はないと切り捨て、その価値を、アイデンティティーを解体する。

俺の手を噛んだお前には「肉」としての利用価値しかない
と。

「許さない？ ブチ殺す？ 上等だ、復讐にこい。ただし命がけでな。ヌルい遠吠えで退屈させんな、口先だけの仕返しは興ざめだ。虚勢なら去勢すんぞ」

「な……」

チンピラが絶句、空気を噛んで口を開閉。

女を犯しながら、呉哥哥は終始冷静だった。周囲を観察し、裏切者の訴えに舌鋒鋭い揶揄で切り込む余裕すらある。

強靱な筋肉に覆われた上半身に汗を伝わせ、切り立った腹筋を波打たせながら、肉褻が収縮する最奥へくり返し楔を

打ち込む。捕食行為に似て激しいセックス……相手へのおもいやりなどかけらもない。

当たり前だ。コレは見せしめなのだ。

「……………」

やつばもらお。

こんな胸糞悪い茶番見せられてんだ、駄賃もらったつていいはずだ。

爪先に落ちた薄っぺらい紙幣をチラリ一瞥、慎重に踏んで引き寄せ、素早く靴に敷く。

作戦成功。まわりを見りや他の連中も同じ手口でしめしめとせしめてる。どうせ麻薬の売り上げだか上納金だかで表に出せねえカネだ、有り難く貰ってやるのがスジってもんだ。

さあ、あとは何食わぬ顔でポケットに突っ込むだけ……
どうかかこうにか足の下の紙幣を回収しようと見計らう俺の前、ベッドの上の呉哥哥が繋がったまま、唐突に体位を変えろ。

「あウツ！」

体内の剛直が一際深くを突き、軽く達する。

「勝手に気イやってんじゃねえよ、のつかれ」

剥き出しのケツをぴしゃりと叩く。膣痙攣に耐えて、這いずるように呉哥哥の腹に跨る女。

「おい。お前もこい」

チンピラが「は？」と返す。「とつとといけよ」とどやされ、部下に背中を蹴倒される。驚きで怒りも消し飛び、のろくさベッドに這い上がれば、呉哥哥が意味深にほほえむ。「裏切られて憎いよな？ 捨てられて哀しいよな？ いいぜえ俺様ちゃんは寛大だ、復讐のチャンスをくれてやる」

「な……」

「ケツにぶちこめ」

「ちよ、や、うそ」

女に狼狽が走る。口の端が醜く引き攣り、媚び諂いの愛想笑いが固まる。

女の肛門はぱっくり開き、泡立った血と精液を滴らせている。

チンピラの顔が一瞬凍り付き……脂汗にまみれた醜悪な笑みが広がる。

俺が何度も見てきた、ギリギリまで追い詰められて開き直った人間の顔。

どん底に叩き落とされやけっぱちになったゲスのツラだ。

「俺は悪くねえ、お前が悪い、こうなったのは全部お前のせいだ」

「ねえやめて、謝るから……おねがい許して……」

「ホントに好きなのは俺だけだつて言ったくせに……淫売の殺し文句に踊らされて人生おしまいだくそつたれ。こつちじゃまだヤツてなかつたな、ためしてみんなのも悪かねえか。使用済みつてのが気に喰わねえが……クソたれながすのは上の口も一緒か」

落ち着いて素数を数えろ。虚ろな目でブツブツ呟く男に女の哀願は届かない。いや、届いてなお無視してるのか……呉哥哥が無造作に顎をしゃくる。

男が乱暴に女の尻を引き立て、肛門にイチモツをあてがうが、萎えきつてお話にならねえ。

「ぐっ……」

ペニスの根元を持ち、雑にしごいてなんとか勃たせようとするが、この状況でやる気になるわきやねえ。せつかなな手付きに焦りが募る。

「早く」

チンピラは命がかかっている。呉哥哥の機嫌を損ねたら殺される。どうかすると死より惨い結末が待っている。

呉哥哥はにやにや笑い、野次馬もにやにや笑い、とことん追い詰められ恥かく男の醜態を眺めている。

直視できず俺は俯く。この状況で嗤えんのは人間やめてるクズだけだ。

「くそつ、勃てよ、勃てつてば……おねがいだ勃てよ頼むよ、ここが一生の分かれ道なんだよ……」

チンピラが必死にイチモツをしごく。じれてフニヤチンのまま振りたくる尻に大臀筋が浮かぶ。

ピッチを速めて腰振りながら女が発狂したように高笑い。

「ざまあみろ！ あんたのなんてただの生あたたかい棒よ、この人がずっとデカくて太くてステキ！」

「るっせえ大事なことなんだ気が散る！」

「悪あがきはやめたら、どうせ勃たないんだから。ムスコもアンタそつくりのフヌケよ、舌の根疲れるまでしゃぶってあげなきゃ使い物にならないくせに」

泣き笑いに溶け崩れた顔に、露骨な侮蔑の念が浮かび上がる。

魔性の女、なんてロマンチックな響きとは無縁な、ただただ惨めで見苦しい顔。

浅ましい肉の悦びと、尊厳を踏みにじられる絶望とが錯綜し、仰け反った喉からヒスメリックな哄笑が迸る。

どうかしてる。

どっちもどつくに狂ってやがる。

醜悪に顔を歪めて口汚く罵倒する女、自慰を強制されなが

ら唾とばし怒号するチンピラ、元は愛し合ったふたりが互いをとことん憎みぬき、自分が生き延びる為の踏み台にしようとする。

蜘蛛の糸は一本きり。

二人掴まれば、プツンと切れる。

心の耳を塞ぐ。心の目を瞑る。そうしなきゃやつてらんねえ。俺はむかし聞いた、極東の島国の小咄を思い出す。きまぐれに地獄にたらされた蜘蛛の糸をめくり、罪人どもが足を引っ張りあう救いのねえ話だ。

すべての元凶は釈迦だ。

極楽浄土にふんぞり返り、あららと地獄を覗きこんで顔をしかめる聖人サマだ。

コイツが余計なマネさえしなきゃ可哀想な罪人どもは無駄な希望に縋らねーですんだ。何不自由ねえ安全圏からしゃやりでて、手前勝手に罪人を憐れみもてあそび、その傲慢を一切自覚せず「人は斯様に醜きものよ」と嘆いてみせる、コイツこそ最大の極悪人だ。

地獄にありもしねエ希望をもちこむ行為のどこが慈悲だ。

てめえが気持ちよくなりてエだけの偽善じゃねえか。

あの話を聞いた時も大層胸糞悪い思いをしたが、目の前の光景はそれに勝る。しかも呉哥哥は確信犯ときた、性悪にも二人をおちよくって楽しんでやがんだ、救いなんてはなから用意してねえのに。

「どうした気分入れろヘタレ野郎」

「テメエの女の穴目の当たりにしても勃たねえなんざ男の風上にもおけねーな」

「呉哥哥のアレと比較されるんじややる気もでねーか」

「せつかくもらつた男を上げるチャンスだ、逝く前にイかせてやんな」

「俺らが耕してやつたんで種蒔き頃だ、女の荷物持ちのケチなチンピラ風情が穴兄弟に昇格だ喜ばよハハッ！」

心の目を開く。

心の耳から手をどける。

「……はア。だりー」

久しぶりに吐きだした声は、煙に乗じて肺の底に沈殿した有害物質のように倦怠と徒労がこごつていた。

下卑た野次が飛び交う渦中で嘆息、後ろ手の死角で素早く

指を動かす。

付け根から第一・第二関節を複雑に折り曲げ、なめらかに波打たす。

「あ、ぐ？」

突然男が固まり、女の笑いが中途半端に途切れる。ふいに訪れた硬直と膠着。

「手が動かかねえ……？」

ペニスに手をかけたまま、完全に一時停止しちまった男と同様に、突如として声を封じられた女がぼくぼく口を開閉。喉の違和感に眉根をキツク寄せる。

当惑の色濃い視線が虚空で絡み、ほんの一瞬、甦った情が通い合つて……。

「無能の上に不能たア使えねえな」

大仰なため息。わざとらしい幻滅のふり。

どう頑張つても勃たない哀れなチンピラに最後通牒を渡し、魔法じみた手捌きで構えたのは二挺の拳銃。

どこにしまつてたのか。目にもとまらぬ早業だ。

「飽きたわ」

銃身に精緻な蛇の彫刻が巻き付く拳銃が、あたかも鎌首もたげるが如く火を噴く。

呉哥哥の両の手がはね、男と女の脳天に仲良く風穴が穿たれる。

「イクのと逝くのが同時なら傑作だったのによ。お前らにやがっかりだ」

自分しか面白くないダジャレが空振り、惘然と口を尖らす。湿った音と共に灰色の脳漿がプチ撒かれてシーツを汚す。

折り重なって倒れ込んだ男と女はほぼ即死だ。命乞いの暇すら与えられなかった。

「うへ」

爪先に脳漿の一部がべちやりとはね、咄嗟に足をどかす。靴裏に隠した紙幣が暴かれ、バレたかと冷汗をかく。

「あー終わった終わった。まあ暇潰しにやなつたなうん」
至極軽い調子でのたまい、呉哥哥がすつきりした顔でズボンにベルトを通す。

激しい運動のあとときて、羽織ったシャツは血と汗と脳漿をたっぷり吸ってる。

嫌そうに胸元を摘まみ上げて匂いを嗅ぎ、サングラス越しの視線をぐるり巡らす。

やべ、目が合った。

「劉」

「……なんスカ」

「シャツ貸せ」

俺に拒否権はない。というか、何か言う前に力ずくで身ぐるみ剥がれた。ベッドから飛び下りて大腿に歩いてきた呉

哥哥が、俺からひったくったシャツに袖を通し、部下どもへ顎をしゃくる。

「死体は片付けとけ」

「「ハイッ!!!!!!」」

「大変いいお返事なこと。さすが俺様ちゃん兵隊さんだね」

剥げてくぐもつた笑いを残し、たつた今テーマエが殺した男と女にやもう一瞥もくれず、さっさと部屋をでていこうとする。

「ひ、ひいッ……」

新たな女の悲鳴に顔を上げる。片手にバケツ、片手にモップを持った掃除婦が室内の血なまぐさい惨状にへたりこむ。すれ違い際、呉哥哥はさも申し訳なきような眉八の字で言つてのける。

「汚しちまってワリイな。とつといてくれ」

腰を抜かしてガタガタ震える掃除婦にボンとチップを弾む。皺くちやの紙幣をひと掴み……法外な額だ。

裸の肩に俺から傘り取ったシャツを粋に羽織り、あたり払う大腿で颯爽と出ていきしな、部屋を振り返って「あ」と声をだす。

「ガメたカネはくれてやる。お礼は見てのお帰りだ」
気付いてやがった。

吐いたら少しだけラクになった。今夜は悪夢を見そうだが、それはまあいい。

スブラツタな死に際に立ち会ったこと自体はどうってことない、ギヤングなんかしてりや日常茶飯事だ。

呉哥哥の性根はひん曲がつてる。俺が女がニガテナの見越した上で、故意に強姦の現場に立ち合わせたのだ。

口元を拭こうと顔を上げる。トイレットペーパーが切れている。カラカラと回る芯を微妙な表情で眺め、もそもそと尻ポケットをまさぐる。

皺くちやの紙幣がでてきた。どさくさまぎれに拾ったモノ……馬鹿な男と女の逃亡資金にあてられるはずだった、カネ。

よく見りや表に赤黒いシミが付いている。血痕だ。男のか女のか……どっちでもいい。端っこを汚す、白っぽいのは脳漿か。

「……ばつちい」

でも、カネはカネだ。

紙幣を翳して軽く引つ張る。手で擦ってかえって汚れを塗り広げる。

ズボンの横に擦り付け、陰惨なシミを拭い去らんと無駄な努力をする。

「洗って乾かしや使えっかな」

覇気のない声で独白、急になにもかもむなしくなってきた

がった。

場末の安宿のトイレで一人たそがれる俺も、裏切り者の血と脳漿がこびりついた紙幣も、それを後生大事に尻ポケットに入れてきたことも、なにもかもが。

レバーを引いて水を流す。渦巻くただ中に惜しげもなく紙幣を捨てる。ヒラリと宙を滑った紙幣は渦に飲み込まれ、あつというまに見えなくなる。

脳天をぶちぬかれた男と女の最期も、呉哥哥のイヤミな笑顔の残像も、全部一緒にもつていけ。

勢いよく流れる水が呉哥哥の嗜虐的な笑顔を連れさつて、ほんの少しだけスツとする。

「キレイなカラダになって出直してこい」

だれにともなく言い捨て、不潔な便所をあとにした。

『僕の話……ですか。ええいいですよ暇ですし、ご覧のとおり時間は売るほど余ってる身の上です。ご存知でしょう、四年前に捕まってからこちらずっと刑務所暮らしです。この目はその時に……ね。僕の対価ツイットですよ。絵描きが目をやられちゃ致命的だ、廃業です。当時の話を聞きたい？ 物好きですね。捕まったのは西の方、カクタスタウンという鄙びた町。サボテンのステーキが名物とか……結局食べれずじまいで残念です。レイヴン・ノーネーム……それが

僕の通り名です』

『絵描きを名乗り、行く先々で少年を拾っては犯行を重ねる殺人鬼。絵描きを自称した理由？ 単純に絵が好きで得意だったからですよ、エモノを誘い込むのにも好都合だった。モデル代を弾むと言えば皆簡単に付いてきた、実際体を売るよりずっと実入りがいい。自分でいうのもなんですが、僕は腰が低く人あたりがいい。話し口調は穏やかで紳士的とあれば、大半の子供はいちいち警戒なんてしません。彼らの多くは十代の若い身空で家計を支える貴重な働き手、法外な報酬を提示したら喜んで付いてくる。少年に狙いを絞った理由？ 友達が欲しかったからです。大の大人がおかしいですか？ 僕の心の時はね、きつとずっと昔で止まってるんです。精神年齢が遅滞してるわけじゃない、責任能力はちゃんとあります、いまさら冤罪だとか無実だとか往生際悪くとぼけたりしません』

『友達がほしかった。だから殺した。この理屈間違ってますか？ おかげでたくさん増えましたよ、ステイプ、レオナルド、アンドリユー……』

『敗因は……相手を侮ったこと、かな。いや……年々手口

が杜撰になっていった。次第に犯行の間隔が狭まって、衝動がエスカレートして……一人友達を増やすともうひとり欲しくなる、どんどん欲深くなっていく……彼らの目から光が消える瞬間が忘れられなくて……消えた光はどこへいくんだろうか。僕の目に移るんですよ。僕が手に入れた光は、僕の中で生き続ける……なんてね。どのみち殺人鬼としてはおしまいだっただんです。新たな被害者として選んだ子に見事してやられちゃいました。連携プレイには勝てませんね……はは。さすがは血の繋がった兄弟といったところでしょう。どちらにしようか迷って弟クンにターゲットを絞ったんですが、さあ準備を整え友達になろうとしたところに、お兄さんが殴りこんで……自警団に囲まれちゃ降参するしかない。いやはや、完敗です』

『この目はその時にやられました。レオナルド……ナイフでぎつくりとね。完全に失明です、何も見えません。いや……古い記憶や友達の顔は見えます。暗闇の奥底から時々浮かび上がってくるんです、泡みみたいに。四年かけてやつと日常生活に差し障りがでない程度に慣れましたけど、やつぱり不便ですね。そして退屈だ。点字を学べば本は読めますが二度と絵筆は握れない……』

『刑務所での生活が知りたい？ 大体想像通りですよ。子どもをレイプした変態がここでどう扱われるかご存知でしょう、おまけに目が不自由ときたら……だいぶ昔なんで忘れてました、後ろが張り裂ける痛みなんて。こうやって座つててもちよつと痛いですが、はは。そのうち痔になるんじゃないか心配で……モツプの柄を突つ込まれた時なんて、腹が破けて医務室送りになりました。友達の気持ちかわかりましたよ、ええ……ああ、これで本当に仲間入りをはしたのかな……僕も彼らとおんなじなんだ』

『僕の絵……へえ、そんなに人気なんですわ、知らなかつた。オークションで高額取引されるとは聞いてましたが……物好きはどこにでもいるんですわ。シリアルキラーの所持品にはプレミアが付く。僕の場合は大量に残された絵に……ただ廃棄処分するより、そつちのほうがずつと合理的で儲かりますものね。収益は遺族に平等に配当される。アンドリューたちの家族にも相応の額が還元される。彼は弟妹思ひだつたから、それは嬉しいかな。特にあの絵……処女作の……僕が生まれ育つた、孤児院の裏庭を描いた。我ながら陰気くさい不気味な絵だと思わんですが、一体だれが購入したのか……壁に飾ったら気が滅入りませんか？ まあ、どこにでも偏執的なコレクターはいますからね……ほかな

らぬ僕自身がそうでしたし。もし僕がなんでもない普通の人間だったら、きつと二束三文で叩き売られてたろうな。どころか、誰ひとり見向きもしなかった。皮肉だな……ヒトはモノじゃなく、モノに付属するエピソードやバックボーンにお金を払うんですね』

『僕は画家としては凡庸です。才能なんてなかった。ただ人よりちよつとだけ器用に見たモノを再現できただけだ。自分の限界は自分自身が一番よく知ってる……タイトル？ いえ……そういえば付けてないな。名付ける発想がなかった。なんていうんですか』

『無垢なる者の墓地……へえ、いいセンスだ。本質をちゃんと理解してる。見る目のある人買い取ってもらつてよかった。絵は僕の子供みたいなもの、そりやいいヒトに引き取ってもらうのが一番だ。これでも画家の端くれですからね』

『自分のしたことを後悔してるかって？ 面白い質問ですね。僕は友達がほしかった、それだけです。生きてる人間とは友達になれない、なら死んだ子になつてもらおうしかない。何故つて、生きてる人間は僕という存在の歪みに耐え

られない。僕は異常だ。ええきつとそうなんでしよう、世間がそういうのなら。でもこれが僕だ、僕はこういうふうにしかな生きられない、そういう生き物なんです。開き直り？……率直に話してらんですけどね。いままら理解してほしいとも思いません。きつかけはあつた。でも言い訳にはならない。後悔なんてしてません、自己の欲望と衝動に正直にあるがまま生きたんです。後悔は自分自身への最大の裏切りだ。その結果、重すぎる対価を払うことになっても……甘んじて受けます。みんなと友達になれたこと、未来永劫後悔なんてしませんよ』

『いま一番怖いのは皆を忘れてしまうことです。物理的な光は失いましたが、心の光は消えてません。ステイブ、アンドリユー、レオナルド……僕には友達がたくさんいる。いまもまだ心の中に生き続けている。イマジナリーフレンドだって刑務官には囁われましたが……彼らには見えないから仕方ない。けれども年々目鼻立ちや声の記憶が薄れていって……いずれ彼らがいなくなる日がとても怖い、隣の裏から去っていく時がおそろしい。僕の中から完全に光が消え、孤独な暗闇に置き去られる……そしてまた、ひとりぼっちになる』

『前述のとおり後悔はしてません。ただ一つ心残りを挙げるなら……あの子たちと友達になりそびれたことですかね……いい子たちだったのに』

(月刊バウンティハンター7月号／特集「あの賞金首は今
く『ワタリガラス』レイヴン・ノーネーム編く)

「相変わらずだなアイツ」

今月号のバウチを流し読みし、おもいつきり顔を顰める。この独占インタビューを組む為になわざわぎムシヨに面会に行つた記者もイカレてる。

暇をもてあましキャスター付きの椅子を回す呉哥哥が、首を伸ばして俺の手元をのぞきこむ。

「レイヴン・ノーネーム？ 聞いたことあんな、何年前かに挙げられた賞金首だつて。絵描きの」

「当時は結構話題になつたつすよ、たまたま滞在してた名もねーガキが活躍したとかで」

「あー……あー、思い出した！ ターゲットとして誘い込んだガキにまんまとしてやられたマヌケだ！ 自警団手引きされたのに気付きもしねーでやんのケケツ！ やっぱダメだな、下半身に血が行って仕事じゃツツケになると」

呉哥哥が軽快に指を弾き、サングラスに覆われた顔を輝か

せる。

快樂天のメインストリートにあるチャイニーズレストランの二階が呉哥哥の事務所だ。

一階は昼の稼ぎ時とあつて、店内の喧騒がやかましく階段を伝つてくる。

窓の外には鈴生りに提灯を連ねた表通りが伸び、赤を基調にした亜細亜風の店舗が軒を連ねる。

呉哥哥も一応「蟲中天」の幹部だ。金があんならよそに引越しゃいいのに何故か知らんが此処をいたく気に入つてもっとマシな物件はいくらでもあんのに、変人の考えることはわからねえ。

組織のカネをかつぱらつて駆け落ちした男女を始末してから数日後、俺と呉哥哥は、事務所で他愛もない世間話をしてる。

俺の名前は劉。本名は言いたくねえ。で、俺の目の前で偉そうに椅子にふんぞりかえつてる偉いヤツは呉。俺は下っ端だが、呉はそこそこの幹部なんで敬称が付く。中国語で「哥哥」は兄貴、親分をさす。

俺もきまりにならつて呉哥哥と呼んじやいるが、ぶつちやけ敬いの心はこれっぽっちもない。とつとどくたばれと内心思っている。だがなかなかくらばらねえ、憎まれっ子世に憚る事例を引くまでもなく悪人ほどしたたかかですとい

のだ。

「どれ、面白エの載つてたか」

他のヤツは出払つてる。みかじめ料の徴収やら見回りやらで忙しいのだ。だもんで、俺が呉哥哥のお相手をするつきやねえ。

なんて素敵な貧乏くじだ、呪われる。

気のない素振りで雑誌をめくり、棒読みで報告する。

「賞金首よりタチが悪い、敵に回したくない賞金首ランキングですつて」

よく見えるよう真ん中を押さえて机上にさしだす。

月刊バウンティハンター略してバウチ（またはバンチ）は、賞金稼ぎおよび賞金首の必携の書だ。

この界限に限つて言えば購読率は90%以上、残り10%は文盲だ。扱う内容は主に賞金首と賞金稼ぎに関する最新ニュースで、それ以外の読み物やグラビアも充実している。

流行に乗り遅れたくねえならもちろんだが、長年行方をくらましてた賞金首の消息や、最近めきめき頭角を現してきた若手賞金稼ぎへのインタビューなど美味しいネタが転がってるもんで、情報収集が目的の読者も多い。

巻頭のピンクパンサー・スタンの巨乳が目に入らないよう

顔を背けがちに献上した雑誌をひったくり、呉哥哥が「おつ」と快哉を上げる。

「見ろよ劉、俺様ちゃんてば堂々4位だ！」

「へー。よかつたつスね」

うつつい反応を返す。個人的には、コイツ以上のド腐れ外道が存在している事実のほうに衝撃だ。

言い忘れたが呉哥哥も賞金稼ぎだ。今の時代ギャングと賞金稼ぎの二股は珍しかねえ、これが結構いい副収入になるのだ。

うまうまと味をしめてギャングから足を洗い専念するヤツ、賞金稼ぎに見切りを付けギャングとして一本立ちするヤツも多い。

俺の感慨を無視して呉哥哥がしみじみと嘯み締める。

「やったね、圏外の13位からランクアップ。外道働きに精出した甲斐があるつてもんだ」

まさかそれが目的で外道働きに精出したわけじゃあるまいな？

投票コメントを読む。

『なんていうか、とにかくヤバイ。マジパない』『命が惜しけりや半径1フィート内に近付くな』『主人が呉哥哥に殺されて1年が過ぎました』『シヨッキングピンクの悪魔！』

……さんさんな言われようだ。

「……一体ナニやりやここまで非難轟々になるんですか」
「いろんなこと」

片目を瞑ってちろつと舌をだす。三十路男のてへぺろなんざうざいだけだ。

ちなみに四位から上は俺でも名前だけ聞いたことある連中だ。人生で絶対関わりたくねえ外道オブ外道ども、胎教に悪党の断末魔聞いてたレベルの厄種だ。

「4位つてのがちよい微妙だが、まあ来年に期待だ。その頃にや俺様ちゃんもお手柄あげまくって大出世、出版社」と買い占めて票の不正操作でぶつちぎり1位ゲットしてやっかんな」

「そうなるといっスねうんマジ」

教訓、有頂天の上司には逆らうな。俺は心のこもらないお追従で呪……祝つてやる。はたして票の水増しで底上げした順位に意味があるのかは別として、だ。

机上に開かれた雑誌にさりげなく目を落とす。当然、俺の名前はどこにもない。念を入れて隅々までさがしたが、どこにもない。

こつそり安堵する俺をよそに、行儀悪く机に脚を投げ出した呉哥哥がぱらぱらとページをめくる。

サングラスの奥の目が見開かれ、ガキっぽい好奇心が露わになる。

「なあ劉くコイツ知ってる？」

呉哥哥が人さし指をおいた先には、『ヤング（ストレイ）スワロー・バード』とあった。見出しを確認。

「抱かれない&抱きたい賞金稼ぎルーキー部門、初のW1位ゲット……」

ちよつと待て、ツツコミどころが多すぎる。

おもわず雑誌をひつたくり極端な近きでガン見。何度見直しても両方で一位とつてるぞ、コイツ。

「どういふことつスカ……」

「投票規定に性別の縛りねエから」

「いやでも、フツー抱きたいつて言ったらオンナなんじゃ……」

「そこらのオンナよかイイってこつたる」

まあ、これまでもちよいちよい番狂わせはあった。抱きたい部門に男がまぎれこんだりとか、抱かれない部門に女がランクインしたりとか、イレギュラーは起こり得た。

そうなるも当然本人への興味がわく。

抱きたい部門と抱かれない部門で前代未聞の同時トップに輝いた、ヤング（ストレイ）スワロー・バードつてのは何者だ？

「……どうでもいいけど通り名長いっスね。かつこは何」

「正式な登録名はヤングスワローだが、巷じゃ野良ツバメストレイスワローのが通りいいんだと」

「若いツバメが正式名……頭大丈夫ですか。あ、呉哥哥じゃなくってコイツですコイツ」

記事には隠し撮りと思しきピンボケの写真が添えられていた。

年の頃は十代半ばか、無造作にハネまくった金髪のがキが下品に中指を立てている。ツバメの刺繍が入ったスタジャンに黒いタンクトップ、下は色落ちしたダメージジーンズ。胸元にさげてるのはちやちなドッグタグか。一癖も二癖もありそうな面構えだ。

「なるほど……美形っスね。男娼つていわれたほうが納得だ」

「今年デビューした新人ちゃんだとき。まだ15」

「ちゃんて」

どうりで若いとおもつた。写真の少年は険のある目付きでこつちを睨んでる。被写体がブレてるのは盗撮のせいじゃなく、無礼なカメラを阻もうと片手で押しつけたからだ。とんでもねえはねつかえりだ。できれば関わりあいたくない。

「ブチ犯してえ」

「…………は？」

冗談であつてくれよと念じて正面を向く。

「コーゆうクソ生意気なガキはねじ伏せたくなる。見ろよこの目、不敵なツラ。仕込み甲斐がありそうじゃねえか。

あーなんか想像したらめっちゃ滾ってきた、ムラムラするー。よし決めた劉お前ひとつ走り拉致つてこい、性奴隷にする」

あんた馬鹿か？

オツムが沸いてんのか？

素で口に出しかけ寸手でセーブ、敵に回したくない賞金稼ぎ今年度4位の顔をまじまじ見直す。

聞くべきことはやまほどあつたが、思考停止に陥つてなかなか言葉がでてこない。

「えーと……一目惚れっすか」

「おうよ」

「写真見ただけで？ 実際どんなヤツかもわかんねーのに？」

「詳しく書いてあるぜ。『ヤング（ストレイ）スワロー・バード（15）今年デビューした期待のルーキー、凄腕のナイフ使い。免許取得からわずか三か月足らずで50万ヘル以上の賞金首を5人挙げた注目株で、現在も快進撃を続け記録更新中。特に近接戦闘に優れ、ナイフと組み合わせた独自のスタイルで実力を発揮する。最大の難は性格。唯我独

尊、傍若無人、傲岸不遜……極め付けに協調性が欠落した生粋のトラブルメーカーで組合が派遣したパートナーと殺し合い未遂を演じること3度、そのうち1度は女性を手籠めにしたとして」

「オンナをレイプ？」

「『……このさきも素行が改善されなければ、ブラックリストへの掲載も検討するとは組合関係者の談』」

「……想像以上にやんちゃですな」

このヤング（ストレイ）スワロー・バードつてのは、相当な問題児らしい。ブラックリスト入りはフリーで活動する連中にとつちや痛手だ、パートナーを派遣してもらえなくなる以外にも色々と不便不利益を被る。

「いいね。ぞくぞくしてきた」

色眼鏡の奥の目が邪悪に細まり、蛇の舌が唇をたどる。

「……呉哥哥はガキも……いや、男もイケるんすか」

「食いごたえあんならどつちでも」

あつげらんかと宣し、五指を組んだ尖塔の上に顎をのつける。

「ますます手に入れたくなつたぜツバメちゃん。想像してみろよ劉、このキレイな顔が崩れる瞬間をさア……」

呉哥哥は、変態だ。

一度こうと言い出したら絶対聞かず、欲しいモノはなにが

なんでも手に入れる。

地位も、女も、なにもかも。

何がそんなに楽しいのか、酔っ払ったように躁的な饒舌でまくしたてる。

「組合にや裏から手回しとく、あそこやコネがあるんだ。なあ劉よ、お前は俺の何だ。可愛い部下だ、そうだろう。だつたら喜んでパシってくれるよな？ お説ごもつとも、いきなり拉致つてなあスマートじゃねエ。じわじわ尾っぽで締めるように生殺しにするのが俺様ちゃんのスタイルだつてうっかり忘れかけてたぜ。組合のブラックリスト入りが噂されるつてこたアもう後がねえ、いくら期待の新人だつてんな泥かぶつたらケチが付く、次こそドカンとキメて見返してエはずだ。そこに餌をくくつた糸をたらしてやりやあ……」

確実に釣れる。

灰緑の鱗に覆われた右頬を歪め、サデイスティックな三日月の笑みを刻む。

ガラガラのスナイク具は、ミュータントとの混血という被差別的立場からそうやってのしあがってきたのだ。

呉哥哥がどんだけヤバイヤツか説明するにや、日々量産される武勇伝を引くのがてつとりばやい。

生憎その手のエピソードにや事欠かねえエキセントリックな男だ。

ある時、俺は呉哥哥のお供で倉庫に行った。

俺は何故か呉哥哥のお気に入りだ。まったく全然これっぽっちも有り難かねエ、どころか迷惑な話だが、一応そうだ。その倉庫は組織の持ち物で、無数の檻があつた。檻中にはポロを纏つて痩せこけたガキどもが監禁されてる。捨てられたか売られたか、どつからかさらわれてきたガキどもだ。

巨大な檻の中に多くて五人程度、ある者は身を寄せ合つて、ある者はひとりぼっちで膝を抱えてる。檻中には用足しに使うおまるがあり、床には汚れた皿が放置されてる。

コンクリ打ち放しの殺風景な倉庫は、『蟲中天』が管理する商品の一時保管所だ。

この商品は生身だもんで、いろいろと手がかかる。メシも食べるしクソもする。見張りだつて必要だ。

納品先はいろいろだ。小児性愛者ご用達の売春宿、実験台を欲しがる製薬会社、クライアントにケツを叩かれ臓器移植のドナーをさがす闇医者……従順なガキには使い道があ

る。

「遠路はるばるご苦労様です呉哥哥」

「さ、こちらへ」

入口シャッター前の舎弟が丁寧にごうべを垂れ、「ハハハハハハ好好你好」と片手を挙げて流す呉哥哥を導く。俺はそのあとから気配を殺して付いていく。

シャッターの隙間から素早く入った倉庫内はだだっ広く薄暗い。垢と糞尿の饅えた匂いが漂って、おもわず顔を顰める。暗闇に慣れた目が巨大なコンテナと鉄の檻をとらえる。太い鉄格子が嵌まった檻の戸は開け放たれ、キィキィと錆びた軋みをたてている。

その前に両膝付いた中年男。屈強な舎弟にふたりがかりで腕をとられて押さえこまれている。幹部のおでまじに気付いた舎弟の一人がそそくさと寄ってきて、声をひそめてご注進する。

「アイツです」

「ガキどもの世話係だつて話だが」

「一日二回、エサと水を取り換えてるうちに情が移ったんでしようね……戸を開けて逃がそうとしました」

「で、何匹逃げた」

舎弟が努めて無表情に首を振る。

呉哥哥が「だろろうな」と冷たく嘲り笑い、力なく蹲ったガ

キどもを何の感慨もなく見詰める。

これから何が行われるかは薄々察しが付いた。知りながら知らないふりをした。世の中知らない方がマシなことがやまほどある、呉哥哥のお付きなんて損な役回りを仰せ付かってるといやでも実感する。

呉哥哥が床に突っ伏した中年男のすぐ後ろに仁王立ち、伝法な濁声を張る。

「覚悟はできたか」

「なんでだよ、なんで逃げねえんだよ」

老け込んで皺だらけの横顔がわなわなと波打ってる。極限まで剥かれた目には、信じられないといった驚愕と絶望の相が浮かぶ。既に袋叩きにされたのか、全身キズだらけ血だらけだ。

中年男の視線の先、開け放たれた檻の中にはガキどもがいた。すっかり生気を失った表情……呼びかけに反応し、虚ろな目がボンヤリこつちを見る。

「せつかく開けてやったのに……逃げていんだぞ、さあ逃げろ。何も心配するな、もう怖くねえ、やつとうちに帰れんだぞ？ 親や家族が待ってる、さっさと行ってやれ。ここにいたら殺されちまう、変態どもに売られてオモチャにされるんだ、わかってんのか」

「あー……」

中年男が泣きながらかきくどき、呉哥哥がポリポリ頭をかき。シカトされてご立腹、って感じじゃない。面倒なことに関わつちまつた徒勞感が間延びしたため息に滲む。

「お取込み中悪いんだけど俺様ちゃんも暇じゃあないんだ。このあと愛人と一発予定が入ってんの、わかる？」

「何ポーツとしてんだ、立てってば、歩けんだろ？ 長いあいだ閉じ込められて足が萎えちまつたか？ だつたらおんぶしてやる……俺にもガキがいたんだ、もう死んじまつたが……ちよつと目え離れた隙に窓から落つこちて、可哀想なことした……ほつとけねえよ、こんな鬼畜の所業……ガキを売るなんて最低だ、ギャングにだつて仁義はあんだろ？ 臓器を抜いてガワは捨て、売春宿で飼い殺し、新薬の実験台……こんなのをぜつてえ間違つてる!!」

激昂した中年男が、両拳で力任せに檻を殴打。

無表情のガキどもが衝撃にビクリと身を竦ませる。

だが誰一人として檻から出ようとしない、膝を抱えて蹲つたままダンマリだ。連中は立てないわけじゃない。鎖で繋がれてるわけでもわけでもない。言葉がわからないわけでもない証拠に、男の泣訴に申し訳なきそうに目を伏せる。

「なんでコイツらが出ねえか知ってるか」

呉哥哥が煙草を啜えて顎をしゃくる。俺は即座にライターを出し、片手で囲つて火を付ける。中年男が漸く振り向き、

真後ろに控える呉哥哥を仰ぐ。眼差しには困惑と疑問の色……

「メシに混ぜ物したのか!? ヤク漬けにして言うこと聞かせてんのか!!」

「メシ用意したのはお前だろ」

「こつから出たら殺すつて脅してんだろ？ こつからでたらひでエ仕置きが待つてるからみんなびびつて出てこねえんだ、やること汚エぞくそつたれ!」

「それも一理あるがよ……」

戸は開け放たれてる。逃げようと思えばすぐできる。なるほど、男の言い分は正論だ。

太い鉄骨が幾何学的に組み合わさつた吹き抜けの天井を仰ぎ、盛大に紫煙を吐く。こつちまで流れてきた煙に咳きこむ俺にはまったく配慮せず、呉哥哥はあつさり言つてのける。

「檻の外が中よりマシだつてだれが決めた？」

「な……」

中年男が絶句。

呉哥哥は檻の中で途方に暮れるガキどもに無関心な一瞥を投げる。よく見りゃ無傷なヤツは一人もない。閉じ込められた全員に傷痕がある。打撲に火傷に切り傷、痛々しい

みみず腫れ……しかし、そのどれもが古い。ある程度日数を経た虐待の痕跡だ。

「連中のキズは娑婆でこさえたもんだ」

鉄格子を手の甲でコツコツ叩き、うつそりと呟く。

「コイツらは親に捨てられるか売られるかしたガキどもだ。逃げたあととは？ 行くあてなんかねえ、どのみち路地裏で野垂れ死ぬつきやねえよ。だつたらエサと水を毎日差し入れてもらえる檻の中のほうがいくらか安全だ、少なくとも食いつぶぐれる心配はねえ」

「よつく言うぜ、あんな犬のエサにも劣る腐つた残飯食わせといて……！」

「さつき言つたよなお前さん、おうちで家族が待つてる、親がむかえてくれる……ばーか、コイツらは売られたんだ。拉致つてきたのも何人かまぎれちやいるがそれだつて劣悪なスラムのガキだ、帰るうちなんてあるもんか。手を汚さず口減らしができて、親はせいせいしてるだろうさ」

「ンなわけあるか、てめえのガキが戻つてきて喜ばねー親がどこにいる！」

「ここだよ」

呉哥哥が靴裏で床を叩き、おどけて両手を広げる。

「わかるか？ 逃げねエのはコイツらの意志、俺らはなんも強制してねえ。オイタをしたらどうなるか吹きこんじゃ

いるが、本気で逃げたきやとつくにそうしてる」

「嘘吐け、てめえらが無理矢理脅して従わせてんだろ可哀想に！」

「平行線だな」

「スラムからかつさらわれて、狭工檻に閉じ込められて、挙句変態にもあそばれておつ死ぬ。コイツらの生まれてきた意味はなんだ、何の為に生きてるんだ!!」

「生まれてきた意味？ ンなもんねーよ」

「なッ……、」

「生後何か月かで親に箱詰めされて窒息した赤ん坊は？ 酷寒のトイレに監禁されて餓死したガキは？ てめえの親に拷問に近エ虐待されて、最後の最期まで苦しみ抜いて死んでつたガキどもの生まれてきた意味つて何よ。ストレス発散？ 臓器を抜かれる為だけに生まれた赤ん坊はどうなるよ。世間の同情の材料にされるために生まれてきやがったのか、お涙頂戴の悲劇の主役をほんの一瞬張る為に？ しかも連中すぐ忘れちまうときた、ほんの束の間オナニーに酔つて飽きたらポイ」

「それ、は」

「なあ、連中の生まれてきた意味つて何よ？ 何の為に生きてんだよ？ ねえよ、そんなもん。生き物は等しく無意

味だ、生まれてくること生きること意味なんざこれっぽっちもねエ。たまたまおキレイに生きることが許された一握りの幸運な馬鹿が、てめエを特別に仕立て上げてエから後付けでこじ付けたんだ。ケツからクソひるのと一緒、腹中でこなれたモンをひりだすんだ。意味つてなア最初からひっ付いてくるんじゃないやねエ、人生を何かご大層なモンと勘違いして美化したアホの妄想だ。動物が生きる意味考えるか？ 生まれてきた理由いちいち悩むか？ ヒトは何かするのために生まれてきたんじゃないやねエ、たまたま生まれてきたから必死こいて生きてるんだ。死ぬ奴は死ぬ」

「う……生まれてきた意味はちゃんとある、コイツらだつて……」

「なにさ」

「しあわせになるために生まれてきたんだ!!」

狂った哄笑が爆ぜる。

呉哥哥が身を仰け反らせて爆笑、甲高く手を打ち鳴らす。

サングラスの奥、目尻に滲んだ涙を人さし指の背で拭い、過呼吸の発作と紛うほど笑いこける呉哥哥に男が食い下がる。

「何がおかしいんだイカレ野郎!!」

「それさ、よく言うよな。ガキはみんな幸せになるために生まれてくる、愛されるために生まれてくるんだぜつて」

笑い声が虚空に吸い込まれるように消え、サングラスの奥、もどから低温の瞳が底冷えする。

「じゃあさ、幸せになれなきや生まれてきた意味ねエの？ だれにも愛されねえなら生きてちやいけねーか」

感情が漂白された言葉が、俺の胸の深くを抉る。

あげ足とられて追い詰められた男が、口惜しげに歯噛みして吠えたてる。

「親代わり、友達、恋人……幸せを掴むチャンスは無限にある、なんでハナっから切り捨てんだよ!」

「恵まれたヤツは自分がいかに恵まれてるか気付かぬエんだ、幸せつてヤツあとことんヒトを鈍感にすっからおつかねエ。んな妄想の正当化こそ愛されねえガキの存在全否定だつて気付かぬエ?」

子どもはみんな愛されるために、幸せになるために生まれてくる。

耳心地がいい言葉だ。それだけの言葉だ。言った本人だけ気持ちよくなる、だれも救わねえ詭弁だ。

親に愛されない子どもは実在する。

親に虐げられ、殺される子どもも大勢いる。

そんなヤツらが「君は愛されるために生まれてきたんだ」

と聞かされて、素直にはいそうですかと納得するか？ 「君はしあわせになるために生まれてきたんだ」と諭されて、やった僕もしあわせになれるんだと舞い上がるか？ ましてや、手遅れになったガキどもが。

生まれてきたのに愛されず、生きていたのに幸せになれず、そんな世の中に腐るほどいるガキどもの終わつちまった価値は一体だれが担保してくれるんだ？

コイツらは犠牲者だ。

なのに重すぎる対価を払わされ続けている。

「だからさ。無意味なんだよ」

ヒトが生まれてくるのに理由なんざまつたくねえ。ただの偶然、ただの避妊の失敗、それだけだ。男と女が愛し合った結果であろうが経緯は変わらねえ。

呉哥哥が煙草を片手に預け、場違いに美味そうに紫煙を燻らせる。

俺も煙草が恋しい。

「天国も地獄もねえ、在るのは俺とお前が愉快に踊るこの世だけ。大体さあ、おつ死んだあとに人間がいく世界があるなら他の生き物にだってなきやおかしじゃん。犬オンリーの天国、猫オンリーの地獄、ありんこオンリーの蟻地

獄……聞いたことあるか？ ねえよな？ なんで人間だけ特別扱いなんだ？ 思い上がりも大概にしろよ、天国も地獄も死ぬのにびびつた連中が拵えた妄想だ。人間は愛されるために生まれてくるんじゃないやねえし、しあわせになるために生きるんでもねえ。ましてや天国の片道切符ゲツトが目的であるもんか」

人生は死ぬまでの暇潰しだと結論付け、異様に尖った犬歯を剥く。

「ヒトの生き死にに特別な意味はねえ、ただの運試しだ。いもしねえくそつたれた神様が等しくお与えくだすつたモノの中で、意味のなさだけに意味がある」

「ボサツとしてんなさつきと立て、いいかこれが最初で最後のチャンスだ、今逃がしたら後ねーぞ！ 死にたくねえなら自分の足で走れ、おい聞いてんのかなんとか言えよ、ヒトがせつかく開けてやつたのに!!」

狂おしい焦燥に駆り立てられ檻をめちやくちやに殴り付ける、皮が剥け血塗れの両拳で殴打して必死に声を張る。

檻に縋り付いて急ぎ立てる中年男を、ボンヤリ見返すガキどもの目はどれも死んでる。

檻の中も外もたいして変わらねえと知ってるのだ。

いや、飯が出るだけ中のがちよつとはマシだ。

売り飛ばされた先で健康な臓器を抜かれても、性病を伝染

されて死ぬまで変態の相手をさせられても、ヤバいクスリを吞まされて全身斑で衰弱しても。

コイツらは、檻の外こそ本当の地獄だとよく知ってる。

「ガキが死ぬのは見たくねエ、たくさんだ……」

「独りよがりの正義感だな。それで誰か救えたか」
偽善の代償は高く付く。

本気でガキどもを助けたいなら戸を開けるだけじゃだめだ、全員まとめて養う位の覚悟がねーとかえって酷だ。

鉄格子を掴んでずり落ちる男を見下ろし、その後頭部に銃口をめりこませる。

中年男は完全に意気阻喪して顔を上げない。善意が幻滅で報われて、生きる気力が失せきった。

そもそも商品に情を移すのが間違いだ。
雇い入れた上の見る目のなさが元凶だ。

「意味だ理由だ、眠てエ戯言ぬかすから後腐れる」
乾いた銃声が天井高く轟き、残響が大気に波紋を広げる。

硝煙立ち上る銃口をひと吹き、呉哥哥がたつた今屠つた世話係の脇腹に蹴りを入れる。

「生きてエから生きる、それだけだ。余計な意味で汚すなよ」

最後にもう一発蹴りを見舞い、舎弟に後始末を命じて立ち去る呉哥哥が、ふと思いついたように振り返って俺を見る。

「……ちらつと思つただけだ」

「なんスか」

「蟻オンリーの蟻地獄つて大アリクイいんの？」

知るか。

賞金稼ぎは一人殺して一人前ということわざがある。

そこいくとギヤングは十人殺した上に十人抱いてようやく一人前と認められるらしいとは呉哥哥の談だ。あの人の言うことだから九割九分九厘嘘だろうが妙な説得力が伴うのを洩々ながら認めざるえない。

俺は半人前もいとこだ。
殺した数はさておき、まだ一回もオンナを抱いてねえ。二十年ちよい生きてきたが一回もだ。

そう、俺は童貞だ。当たり前だ、オンナ苦手なのにオンナ抱けるかっての。さりとして男色に走る趣味もねエ、掘るのも掘られるのもごめんだ。自分の恋愛対象および性的対象が男か女か、なんて一度もだれかに惚れたことねえからハッキリわからねえ。

世の中にやノンセクシユアルだかアセクシユアルだかってマイノリテイがいて、他者に対して性的欲求や恋愛感情を

さっぱり抱かないんだそうだ。きちんと診断を受けたことがねえから確信は持てないが、ひよつとしたら俺も該当するかもしんねえ。

二十年ちよい人間やってりや世の中の大半はちよつとした惚れた腫れたすつたもんだを経験してるはずで、相手が男だろうが女だろうが大人だろうが子供だろうが現実だろうが非現実だろうが、それとはまったく無縁に生きてきた俺は、人間としてどつか欠けてるんじゃないか時々不安になる。

かといって、女と結婚して家庭を作る未来なんてとてもじゃないが想像できない。自分がどんな顔でガキを抱くかアンタ想像できるか？ 俺はできねえ、逆立ちしたつて無理だ。二親揃った平凡な家庭つてヤツを俺は知らねえ。

俺にいたのは、あの人だけだ。
芯から歪みきつた可哀想な女。

「はア……だりー……」

メンソールの爽快感が喉を冷やして鼻腔に抜ける。

呉哥哥の無茶振りはいまに始まったことじゃねえ、とつくになれつこだ。あの人はそうやって周囲を試して愉しんでる。

『はあ？ なんて俺が』

『適任だから』

『自分で行きやいいじゃねっすか』

『俺様ちゃんはこの見えて忙しいの、片付けなきゃいけないお仕事か山ほどある。そんでお前をご指名だ』

『たつた今まで暇をもてあましてたくせに……ていうか回りくどいっすよ、いちいち組合通して接近するなんて。力づくで拉致……は乱暴っすけど、コイツに下心があるならフツーに近付きやいいんじや』

数日前の事務所での押し問答を思い出す。諦め悪く食い下がる俺に、立てた人さし指を「チツチツ」と鳴らし、もつたいぶつて念を押す。

『わつかんねーかな俺様ちゃんの善意が。いまいちばつとしねーお前に手柄をくれてやろうつて言うんだぜ、もつと喜べ。残念ながら仕事で手はなせねえ俺様ちゃんに代わつて、お前がツバメちゃんとパートナー組んでマブダチになる。好都合にもあちらさんは崖つぶち、このチャンスを探したらあとがねえ。お前は相棒のフリしてツバメちゃんを探る、一緒に事に当たつて麗しい友情育むんだ。野良ツバメは大したはねつかえりで、周りに人を寄せ付けねえつて評判じゃねえか。でも仕事なら別、どんだけ相手が気に入らなくたつて我慢する。そこに付け込む隙ができる』

片頬笑んで絵図を引く呉哥哥を疑心暗鬼で見返す。

本当だろうか？ どうにも都合よく聞こえる、そんなにうまくいきっこねえ。本音が顔に出てたのか、呉哥哥が野良ツバメの載ったページを手の甲でくりかえし叩く。

『コイツがどんなヤツか、お前自身の目で確かめてこい』
どの程度面白いヤツか。どの程度使えるのか。

呉哥哥は精力絶倫の快樂主義者だが、下半身に脳移植した色狂いじゃない。公私混同で部下をパシらせるアホでもない。俺は机の前に立ち、おつかかなびつくり、せいぜい低姿勢にお伺いを立てる。

『スカウト考えてるんすか』

呉哥哥は意味深に笑って答ええない。肯定。

もう一度じつくりとページを見直す。

呉哥哥が野良ツバメにただならぬ興味をもっているのは事実だが、それは性欲にとどまらない。

きつと一目見て勤が働いたのだ、コイツは伸びしろがあるぞ、よそに唾付けられる前に引き入れたいと。

この手の勤にかけちや異様に冴えているのが、底辺から叩き上げて今の地位を掴んだラトウルスネイクだ。

野良ツバメのルーキーらしからぬ傍若無人っぷりと目覚ましい実績は、実力のある若造が大好きな呉哥哥の食指をそそるのに十分だった。

『ツバメちゃんをブチ犯してエのはホント、このキレイな顔を涙と泪水とザーメンでぐっちゃんぐっちゃんにしたらたまらねえだろうな。けどな、中身が伴ってなきやだめだ。実際会って萎えた、なんて興ざめだろ？　そこでお前の出番だ劉ちゃん、コイツがホントに俺様ちゃんの遊びに足る相手なのか、俺様ちゃんを満足に至らせる骨のある男なのか、ちよつくら値踏みしてこい』

『いや、ちよ、簡単に言ってくれつけど』

『あー。そうかわりい、オツムのわりいお前にもわかりやすくたとえるとだな、万一おっぱじめようってその時ンなつて風俗嬢の穴とサイズが合わねーなんてなつたらどつちらけじゃん。だったらその前に自分に当たらせたほうが無駄がねーじゃん』

『たとえが下品すぎてちよつと何言つてつかわかんねーんだけど』

おもわず敬語を忘れるレベルで動揺が広がる。

呉哥哥は背凭れに背中を沈め、

『盛ってるんじゃなく、ここに書いてあることが事実ならすげエ快拳だ。ここ十年来のルーキーの中でもダントツの逸材。三か月足らずで50万ヘル級の賞金首を5人、この数字がマジにマジなら今頃あつちこつちからスカウトが殺到してるだろうさ。フリーなんだからコイツ？　決まった相手

がいねえ今が狙い目だ。けど噂つてなア往々にして一人歩きするもんだ、はたして俺様ちゃん直々に腰を上げる価値があるかどうか、それを見てこいつて言つてんの。この手のタイプに真つ正面から行つても撃沈だ、プライドが高いかな。搦め手で攻めたほうが力量はかれるてなもんよ』そこで一呼吸おき、共犯を抱きこむようないたずらっぽい表情を作る。

サングラスを通していても、腹の底をなぜられるような猫介な眼差しにぞくりとする。

『で、搦め手でいくならお前が一番だ。嘔吐きはお手の物だろ』

呉哥哥は俺の使い方をよく理解している。

俺という人間の本性を底まで知り尽くしているのだ。

上司の言い分をわかりやすく訳すところだ。

コイツが使えるかそうじゃねえか、ハードな遊びにも耐えられるかタマかどうか、直接出向くのはかつたりいから代わりに行つて調べてこい。

野良ツバメに大いに興味はあるが幹部とあろうもの尻軽に動けないから、気安く顎で使える下つ端（俺）をバシらせ、勧誘のまねごとさせようつて魂胆なのだ。

ホント、建前に性欲が絡むと始末が悪イ。

『回りくどい？ ハハツ、仕込みはハネてごろうじろつて

ね』

即戦力となる新人はどの業界でも引く手あまただ。

実際蟲中天には賞金稼ぎを兼ねる構成員が多く在籍し、おもに荒事方面の第一線で活躍している。

野良ツバメは凄腕のナイフ使いで近接戦闘に天才的なセンスを見せる。雑誌に掲載された内容が真実なら、先の抗争で前衛陣を大量に失い、戦力の補充に躍起になつてる蟲中天がほつとく手はない。殺し屋は常に募集中だ。

有能な若手を困つて前衛を厚くしたい上の思惑に、ぼつと出の野良ツバメはびたりとはまる。

そんなこんなで満を持して送り出されたものの、俺はブルーだ。

元から人付き合いは上手くない。呉哥哥がわざわざ俺を指名したのは、手のこんだ嫌がらせじゃねえかと疑つてゐる。

呉哥哥のコネのおかげか、よっぽど他に組みたがる自殺志願者の物好きがいなかったのか、予定通りヤング（ストレイ）スワロー・バードの相棒役に振り当てられたが、もうすでに胃が痛い。

勧誘とか絶対無理。なんでギヤングとかやつてんの？ 自

分でも謎だ。そろそろ足洗いたい、いやマジで。そんで来世に転職したい。

「はアゝ……このままふけちまおうかな……」

大の大人としてダメダメな願望を煙に乗せて吐きだす。足も自然と重くなる。

待ち合わせ場所へ向かうのが憂鬱だ。調査の基本を踏襲し、事前に嘗てスワローが組んだ女……同業の賞金稼ぎ……に会ってきたのだが、その時の話が滅入る一方の気分にし重しをのせる。

哀しいかな、心底かつたるくても上には逆らえない。逆らえばあとが怖いと体に叩きこまれている。昼間の繁華街は妙に色褪せて元気がなく、人通りも疎らだ。初顔合わせとあつて、余計に緊張する。

足元に転がる空き缶を軽く蹴飛ばし、ズボンのポケットに手を突っ込んでぼやく。

「大体さ、無茶振りなんだよ……俺が女ニガテナ童貞コミュ障だって知ってたんだろ、いや童貞カンケーねーけど、断じてカンケーねーけど……なんだってアイツの気まぐれに付き合わされなきゃなんねーの、かわいこちゃんに唾付けてエならテメエがいけよ、俺にぼつかめんどーごと押し付けてふんぞり返りやがって……死ぬ、マジで死ぬ。生卵喉に詰まらせて白目剥いて死ぬ」

哥哥がいぬまになんとやら、積年の恨みをこめた呪詛を陰々滅々と呟く。本人がいないとこじやへりくだる必要ねえからタメ口でアイツよばわりだ。

この界限はアンデッドエンドの中では比較的治安のいい繁華街だ。

なおここという「治安がいい」は一日の死者数がギリギリ10人未滿つてことで、路地裏でドラッグが取引されてないとか、クラブのトイレでレイプがおきないってことじゃない。

本格的にネオンが入って賑わいだすのは夜からで、まだ時間帯が早すぎる。

化粧を落とした商売女の如く、そっけない素顔をさらす周囲の店を横目に角を曲がれば、唐突に空間が円くひらける。石畳を敷いた広場の中心に、やたらと装飾的な巨大な噴水が鎮座している。

世界一無駄なレプリカといわれる、アンデッドエンドの名物だ。

もう知ってるたア思うが、ここは途方もなくてつけえクレーター跡にできた街だ。

で、大戦前に栄えた元の街にや、あるお偉いさんを記念した噴水があった。

不動産業で巨万の財を成した父親をもち、そのカネでさん

ざん放蕩しまくったアホが、なんも市に貢献してねエくせに、死ぬ前にボンと寄付して「自分の銅像を建てろ」とただをこねた。

市はもんのすげー悩んだ末そのカネで噴水を建設、一番後ろの目立たねえ場所に本人の像をこっそりおいた。

そんな笑い話のある名所の噴水も戦火で粉々なっちゃまったが、土の中からひよっこり曰く付きの銅像がほりだされ、それもほぼ無傷の状態ときて、「なんてしぶてんだ」「悪運を従えてる」と不謹慎に盛り上がった連中ができるだけ当時の資料に忠実に復元したのだ。

故にこの広場は、最強の悪運を招く場所……悪運バッドラックコートの法廷と呼ばれている。

由来を省みるに賞金稼ぎにとつちや縁起のいい場所とされ、今もご同輩とおぼしき目付きのよくねエ連中が屯つちや、屋台のホットドッグを頬張ったり殴り合いをおつぱじめたりと思いつきの時を過ごしている。

青空へ上つていく紫煙を目で追い、惰性で裏に回る。

壮麗な白亜の噴水にはあぎとを開けた獅子の彫刻が飾られ、優美に湾曲した縁が美しい。

外観はチヨコレートフォンデュの台座の如く三段式で、てっぺんの水盆が絶えず虹色のプリズムを孕んだ透明な水を噴き上げている。

噴水の裏側、曰く付きの銅像の傍らにガキがいる。風船ガムをくちやくちや囁んでは膨らませ、両手でナイフをもてあそんでいる。

右から左へ高速で受け渡し、手首を軽く撓らせて投げ上げ、虚空でキャッチ&リリース。まるでジャグリングだ。手に吸い付いてるようで、束の間見とれる。

「アレか……」

写真はピンボケだった。実物はもつと上玉だ。

太陽の光を受けて燦々ときらめくイエローゴルドの髪と、セピアを一滴落とし込んだ赤茶の眸。15にしちや背が高く、しなやかで均整取れた体付きだ。

ツバメのエンブレムが胸に刺繍されたスタジャンの下は黒いタンクトップと擦り切れたジーンズで、年季の入ったスニーカーを履いている。野良ツバメは実に退屈そうに、ナイフで一人遊びに耽っていた。

時折ぱちんと弾けるガムを指ではがして捏ね回し、再び口に放りこむ。

なにをしても絵になるヤツってなあいるもんだ。

奇妙な感慨を抱き、少し離れた場所で立ち尽くす俺に野良ツバメが気付く。

「アンタが劉？」

「お前が野良ツバメか」

いけね、うつかり蔑称のほう言っちゃまった。口を滑らした報いは、咄嗟に飛んで来たナイフだ。

「!! ツ、」

靴の先にナイフが当たってはねる。間一髪、足を引いてなけりやあぶなかつた。噂通り短気だ。のっそりと身を起こして歩いてきた野良ツバメは、「ふくん」と、頭のとっぺんから爪先まで不躰に俺を眺めまわす。その間もガムの咀嚼をやめねえのが不愉快だ。このクソガキ、小馬鹿にしきつてる。

「チャイニーズって聞いてたけど」

「……そうだけど」

「髪と瞳は自前？」

「いろいろ雑ざってんだよ」

薄汚い茶髪先端を引つ張り、ゴツイ伊達眼鏡の奥、ドブのように濁ったダークブラウンの瞳を弱々しく伏せる。容姿はコンプレックスだ。鼻梁に散つたそばかすは、結局大人になっても消えなかつた。歯並びだけはガキの頃に矯正した。あの人は、そういうのをひどく気にしたから。

『女の子は歯を大事にしなきゃ。真っ白に磨くのよ』

『あなたは歯並びが汚いから、口を開けて笑っちゃだめ』

おかげでいまも口を開けて笑うのがへただ。

「チャイニーズ以外にも？ へえ、どうりで……その笑える服はなんか罰ゲーム？ 眼鏡は度が入ってねえな、伊達か。似合ってるからやめたら？ すげー痩せてっけどクスリ？ ヤク中ならチェンジ。手首とかすげー細エぞ、蠅が止まったら折れねエ？」

嫌な思い出がぶり返して黙りこくる俺をよそに、初対面のガキがすげえ詮索を重ねる。速慮という概念を知らない、清々しいまでの無神経っぷりだ。

なんにせよ距離が近い。

あんまりぐいぐいこられると、その、困る。

大股に距離を詰め、殆ど鼻先が触れ合う距離でのぞきこんでくるスワローにたじろいで、意味なく両手でおしとどめる。

「あのさ、俺達初対面じゃん」

「それがどうした」

「時候の挨拶とか自己紹介とか……いやまあそんなガツツリはいらねーけど、一応様式美じゃん。そんな一方的に根掘り葉掘り詮索されても参っちゃま痛てててててて!!」いきなり何してくれちゃってんだコイツ。俺の右手を唐突に掴み、手首を締め上げて口笛を吹く。

「けっこー根性あんじゃん。止まり木ぐらいにやなりそう

だ」

してやったりと笑うスワローをふりほどき、赤くなつた手首をさする。俺は初対面でコイツが嫌いになつた。大嫌いだ。いくらべつびんだろうが、根性悪とは付き合いたくねエ。前にコイツと組んだ女の話が脳裏に甦り、生理的な嫌悪感と警戒心が膨らむ。

「来るのおせーぞ、待たせんな」

「そんな遅れてねーよ、ちようどだよ。お前が早くきすぎなんだよ」

「あアん？ 文句あつか、早くきてやつたんだからそつちも合わせるのがスジつてもんだろうが」

「そんなひん曲がつたスジはしらねーな」

乾いた破裂音と共にガムが弾け、それを指先で摘まんで口へ入れ、呟く。

「ヤングスワローだ」

「劉」

「よし自己紹介は済んだ、とつとと行こうぜ。テキトーな店で打ち合わせだ」

素通りしかけた銅像を見上げ、顔に疑問符を浮かべる。

「このオッサンえらい嫌われつぶりだな。なにやつたんだ」

「この街にきたばかりだつて。んじや知らなくても無理ねえか」

「もつたいぶんなよ」

「あー……早い話金持ちのわがままだよ。たんまり寄付してやつから死後に銅像たてろつて駄々こねた、親の遺産食い潰しただけで貢献なんざ一個もしてねエのに。で、仕方ねえからいちばん奥に建ててやつたのさ」

「そんなに銅像欲しいもんかね。鑄溶かして贗金作りに回したほうが世の中に貢献しそうだ」

「貢献の使い方は間違つてるが、概ね賛成」
「なんだ、意外と気が合いそうじゃん。」

ぶっかけられたペンキが乾いてサイケデリックに染まり、猥雑な落書きにまみれた銅像を見上げるガキが、無意識に懐をさぐつて舌打ち。

「煙草もつてねえ？」

ヒトにモノ頼む態度かよ。「すまねえけど」とか付けろよ。よつぼど注意してやろうかと思つたが、年の離れたガキ相手にいちいちキレるのも不毛だ。大人になれよ俺。きつと反抗期なんだ、だれにでもある粋がりたい年頃つてヤツだ。煙草の貸し借りで男の友情が芽生えることもないとはいえない。最低限のスキンシップは人間関係を円滑に進めるコツだ。

俺は何かの罰ゲームと言われて内心ちよつと傷付いてるシャツの内側から潰れた箱を掴み、一本頭をだしてガキに差し

向ける。

真新しい煙草を摘まんで口へもつていき、ライターで火を付けて美味そうに一服。ちよつと仰け反つた顎と喉仏のラインがキレイだな、と見とれる隙もなく、額に熱源が生じる。

「!?!? ツあつち、」

目の前のガキが、即座に真ん中から煙草をへし折つて投げ付ける暴挙にでたのだ。軽く火傷した額を両手で押さえ、しやがみこんで悶絶する俺の背後で、ほんの数分前に会つたばかりのガキが理不尽に怒り狂つてる。

「ツぎけんな、メンソールじゃねえかよ使えねエな! 煙草つていやタンブルウイード一択だろうが、メンソールなんてふかすヤツの気が知れねえぜオカマになつちまうぞ喉スースーして気色わりい、ハツカはピリピリして嫌いなんだよ!!」

「くくく煙草やるくせにお子様舌かよ、なんだよその理不尽な屁理屈……!」

「穴埋め? 代打? ハッ知るかつてんだ、ほんの束の間だろーが俺様の相棒名乗ろうつてんならモクの好みくらいちゃんと把握しとけ」

これからコンビ組もうって初対面の人間にナイフ投げるわ罵倒するわ借りた煙草をへし折つてヤキ入れるわ、やるこ

となすこと無茶苦茶だ。

衝撃の出会いからたつた五分で、俺はコイツが大嫌いになった。

「ちようどいいや、昼飯まだなんだ。食いながら話そうぜ」

「きたことあんの?」

「いんや。初めて」

すつかり常連ツラで広場を突つ切るスワロー。

無駄に態度がでかい。街にきて一年足らずなら殆どおのぼりさんじゃねえか、田舎者ならもうちよい恥じらいとか可愛げをもつてほしい。

それともこれが若手最注目株の自信や余裕つてヤツだろうか……広場を抜けるあいだにも老若男女とりませた好奇と好色の視線が刺さる。

できるだけ目立たないでいたい俺と違って、ただ歩くだけで人を振り向かせるオーラがある。

「あ」

噴水広場を囲む物屋の一軒、今しもスワローが目指す先の扉にでかでかと貼り紙がしてある。

肩越しに目撃し、踏み出しかけた足がとまる。

『イレギュラーお断り』

この手の貼り紙は珍しくない、繁華街じや四割の店で見かける。

いくらアンデッドエンドの懐が広く人種の坩堝と化してるとはいえ、ミュータントへの差別と偏見は根強い。遺伝子をいじくって量産された生物兵器、自然の摂理に抗うキメラと、極右の連中の激しい迫害の対象になつてゐる。ミュータントの出現からもう二・三代は経てゐるのに、愚かな人間サマはてめえと似て非なる亜種を生理的に受け入れられねえのだ。

乾いた口内を唾で湿し、少しためらつてから口を開く。

「……この店はやめね？」

「あ？　なんで」

スワローが器用に肩を片方はねあげ振り向く。俺は言葉に代えて顎をしやくる。目の前まできてようやく貼り紙に氣付いたスワローが、馬鹿にしたように唇の片端をねじる。

「俺にや関係ねー」

「まあ……理屈じゃそうだけどさ」

間がもたない。煙草が喫いたい。ズボンの尻ポケットから一本とりだし点火、唇にひっかけて吸い込み、紫煙を燻らせて時間稼ぎ。

メンソールで喉を冷やしながらバツ悪げに首筋をなで、「OPEN」の看板がかかったガラス扉越しに店内を覗く。

「……マナー以外で客をふるいにかける店つて、なんかやじゃん」

「へえ」

スワローが大股に引き返し、右から左から首を伸ばしては引つ込めて圧をかけてくる。

至近距離からの威圧的な眼光に嫌な汗が滲み、人の目を真っ直ぐ見ない言い訳にかけ始めた眼鏡の奥、濁つた色の瞳がきよどる。

「うちのと似たよーなこと言うんだな」

「うちの？」

「偽善者ぶんなつてこと」
カマトト

左右非対称の嘲弄の表情に、自分でも情けないほど動揺する。

コイツの言うとおりだ。

てめえかわいさに檻の中のガキどもを見殺しにしたくせに、ミュータントへのボンヤリした同情だか共感だかで敷居を跨がないなんて妙な話だ。

スワローが苛立たしげに足踏みする。

「じゃあ一人で食つてくつから表で待つてろ」

「待て待て、打ち合わせはどうなった？　てめえ一人で待つてろ」

ちや意味ねーだろ、俺はおんもで立ちんぼか」

「ハンドサインで会話するか」

「中指と親指立てる以外に知ってんの？ ピースサインは別で」

スワローがドヤ顔で左手人さし指と親指の輪っかを作り、右手の人さし指をゆっくり通してく。

最低に卑猥なサインに閉口。

「くくくお前さア!!」

「お？ アンタこの意味知ってんの、だつたら教えてくれ。俺ってば物知らずの田舎もんだから街角の娼婦やポン引きがよくやつてるこのサインがなんのことだかさっぱりだよ」

「カマトトぶってんじやねえぞすれっからしが、穴に挿れるもんつていつたらアレだろが」

「アレ？ アレってどれだよおい困つた全然わかんねえ、じらさねーでちゃんと俺の顔と目エ見てハッキリ言えよ。マツチ棒？ 栓抜き？ ウッドベツカーのくちばし？」

甲高く声を張ってわざとらしくすつとぼける、にやけツラをぶつとばしてえ。

悪ノリして卑猥なハンドサインをあれこれ送りまくるガキを、周囲の連中が珍獣さながら遠巻きにする。俺は顔真っ赤で必死に他人のフリをする、スワローはそれをいいことにはしやぎまくって、両手をあざやかに結んでほどき、開

いて絡め、知る限り全ての下品なハンドサインを連発する。

「なーコレは？ こっち見ろよオーイ」

俺のド真ん前で穴にすぼすぼ指を出し入れする。無視。

「じゃあコレは？」

「知らね……って、え、何それマジで知らねえ」

「四十八手の燕返し」

「なんで知ってんの!？」

「母さんの馴染みに教わつた」

手で四十八手の体位再現するとかめちや器用だな……ある種の才能だ。俺はまあ、女性恐怖症の克服(リレフ)に仕入れた向こうの春画(ポルノ)でたまたま知つたんだが……日本人は変態だ。

スワローが穴に指を突っ込んだまま毒突く。

「シカトかよツレねえな。この程度でカオ赤くして童貞かよ」

「そりや『いまからテメエの傷口ほじくつて砕けた骨かきまぜてやつけど準備OK?』のサインだ」

「へエそうなんだ、さつすが都会人物知りだな、ちよつとだけ見直したわ喜べ童貞」

「童貞ゆうな」

「『いまから俺の45口径でてめえの脳天に風穴プチ開けるが、もったいねーから弾丸は回収するぜ』だと思つてた」半ばキレてでたらめを叫べば、悪ぶぎけをしめくつたス

ワローがお手上げのポーズをとる。

「どうしても相席したくねーっていうならしかたねえ、せいぜい窓に貼り付いてお預け喰ってな」

「なんでそうなるんだよ」

「放置ブレイが好きなんだろ。わかったよ、付き合っちゃってやっから」

「薄情とか殺生とかそういう問題じゃねえ、クズだなお前」
いけね、本音がでた。キレるかと思構えたが意外にも顔色を変えず、さも大袈裟に天を仰いでため息を吐く。

ケバブ、小籠包、ベトナム風餃子……広場に薙めく無国籍の屋台を見回し、むしろ生き生きと表情を弾ませる。

「折衷案でおごりな」

スワローが親指の背でさす先にはホットドッグの屋台がでている。そばにはテーブルとチェアが何脚かおかれ、青空の下で飲み食いできる仕様だ。

仕方ないと妥協して方向転換、白いパンを改造した屋台へ近付いていく。カウンターに片腕を敷き、もう片方の指を二本立てる。

「あー、ホットドッグ二個」

「かたつぽはぶつといのでレタスしやしきしやしき、マスタードとケチャップはこれでもかってたつぷりかけてくれ。ピクルスはなしで」

しまいまで言わず俺を押しつけカウンターに腕を付いたスワローが、加えて注文を付ける。

「そこにあんの好きだけかけな」

客商売には不向きな主人が、カウンターの端に置かれたセルフサービスのケチャップとマスタードを示す。

「よつしや」

キツネ色の焼き目の付いたパンにジューシーなソーセージとレタスを挟み、さしだすのを待ちきれずひったくるように受け取って、反対の手に二本ひと掴みにしたケチャップとマスタードを遠慮なくぶっかける。

ソーセージの上に波形を描いて大量の赤と黄が絞り出され、見るだけで胸焼けする。

スワローが大口開けてホットドッグを頬張り咀嚼。

豪快な食べ方。実にうまそうだ。

不思議と汚いとは感じなかった。肉食獣が獲物を貪り喰らうかのような、野性的な美しさを帯びてるせいかな。太陽にきらめくイエローゴールドの髪もたてがみつぽい。

口のまわりをケチャップとマスタードでべたべた汚し、頬にとんだ赤いハネを親指で拭い、あつというまに三分の一をたいたらげたガキへおせっかいな苦言を呈す。

「ちやんと嘸まねーと喉詰まらずぞ」

「てめえこそ、いらねーならくれよ」

「俺の胃はナイーブなんだよ……っていうか嘔みながらしゃべるな汚え、こつちとばすな」

立ち話もなんだ。新聞紙に包まれたホットドッグを持って、ベンチがわりの噴水の縁石に場所を移す。飲食用のスペースもあるが、人に聞かれたくない話をするにはできるだけ目立たない方が都合がいい。

速攻ホットドッグを食べ終えたスワローは、まだ物足りなさげに屋台を見ちやあ「一本じやたりねえよ」とかほざいてやがる。

「ヒトのカネで食うメシはうまいかガキ」

俺はスワローよりかはやや上品に、もそもそホットドッグを食す。

口を開けて嘔ると汚いつてガキの頃叱られたっけ。スワローにはそういう躰をしてくれる親がいなかったのか？ 野良ツバメの生い立ちなんざ心底興味ねえしどうでもいいけど……視線を感じて振り返りや、スワローが嫌そうな顔で俺の食べ方を観察してる。

「……なに。言いたいことあんならどうぞ」

「まっずそうな食い方」

「るっせ、よく噛んで食べてんだよ。コレがきよう最初で最後のメシだ、よくつく味わつて唾液腺にデジャビュさせるんだ。後味反芻すりゃあと48時間はイケる」

「金欠？」

「悪いかよ畜生大人は大変なんだよ、モクで腹膨らませなきゃやつてられつか」

自慢じゃねえがボケツトはすつからかんだ。今月は特に厳しい。呉哥哥の無茶振りを泣く泣く呑んでパシリを拝命したのは、ちよつとでも生活の足しにしてえからだ。

とつくに食い終わりやることねえスワローは、唇に塗されたケチャップを意地汚くなめとつて「悪かねえな」と尊大な感想を述べる。どうやらお気に召したらしい、安い舌に感謝する。ぶつちやけもつと高いのおごれつて言われたら無理だった。

結局入らずじまいだった店を一瞥、さして未練もなくスワローがふんぞり返る。

「ま、選^レばれ^レし人^キ間^ユお断^ラりなら俺のケツに合う椅子はねえな」

初対面も同然のガキと、くだらねえことくつちやべりながら昼下がりの広場で過ごす。妙な成り行きだ。俺とコイツの組み合わせが、他の連中にやどう映ってるか興味がわく。一目で賞金稼ぎと見抜けるのは少数派にちがいない。

スワローはともかく、俺はその手の威圧感だの殺気だのを哀しいかなまつたく持ち合わせてねえ。

いちばん妥当な線はおそらく……

「恐喝の加害者と被害者」

「あん？」

「いや、こつちの話。ツツコミ無用で頼む」

「いうかそれ想像でもなんでもなくただの事実だろ。自分の発想に苦笑する俺の隣、スワローが「で」と、油分で汚れた手をはたいて仕切り直す。

「本題突入。アンタが今回の相棒ってことでOK？」

「OK」

「劉か……劉ね……聞いたことねーな、ほんとに強エの？へタ打って足引つ張られんのはごめんだね」

「そこは組合に言ってくれ、あそこは賞金稼ぎ限定の職安だ。はぐれもんがわんさかいる中なるべく条件にあった物件を薦めてくれる、プラス顔合わせのお膳立てもな。お前のアシストに派遣されたってこたア、俺が一番相性いいって諸々のデータ検証した上であちらサンが弾き出したんだろ」

口からでまかせを饒舌にまくしたてるのは、一抹のうしろめたさを解消するため。スワローは半信半疑のジト目で俺を睨んでいたが、おもむろにスタジャンの懐に手を突っ込む。

「コヨーテ・ダドリー」

顔の前で乱暴に広げてみせたのは、皺くちやの手配書。そ

こに載っていたのは舌に髑髏の刺青を入れた二十代後半の男。

頭蓋が狭く顎が尖った陰惨な容貌は、飢え狂って理性が蒸発しかけたコヨーテを思わせる。首には黒革に金属の鉤を打ったゴツイ首輪を嵌めている。

スワローから借りた手配書を隅々まで見、盛大に顔を顰める。

「厄介そうだな」

「ジャンクヤードの鬪犬場を仕切るチンピラ。ドラッグで仕込んだワン公殺し合わせてヤマを張る、悪趣味な賭け事の親だ。前々から詐欺と暴行の重犯で目エ付けられちやいたが、先週正式にヴィクトムが登録されて賞金首リスト入り」

ジャンクヤードとはアンデッドエンドのスラム街にある胡乱な市場ヤードの俗称。呪いの骨董、名画の贋作、人魚のミイラ、ユニコーンの角、妖精の標本……金さえ出せば世界中のどんなモノでも手に入ると言われ、裏社会に出回る盗品すら秤ののつけられる。

今回追うヨーテ・ダドリーという賞金首は、その市場の片隅で自分が調教した犬を使い、鬪犬ショーを開催していた。興行は大盛況だが、もちろんからくりがある。

スワローが手配書の事項と調査の結果とを掻い摘んで報告する。

「コヨーテ・ダドリーは餌にドラッグの混ぜ物をして犬を育てる……早い話がドーピングだ。たんまりヤクを盛られた犬は寿命が極端に縮んで早死にするかわりに、筋肉が異様に増強されて痛みに鈍くなる……言つちまえばより見せ物向きの闘犬に改造されるつてワケ。コイツは交配や斡旋も手がけてて、飼われてる犬の中にや畸形もたくさんいる」

「親子だろうが兄弟だろうが構わず番わせて無理矢理産ませるんだつて？ 悪徳ブリーダーと一緒だな」

「で、生まれた子犬を法外な値段で売り付ける。レアな犬ほど金持ちがよだれたらして欲しがるかな、純血種ならなおさらだ」

「もともと個体数の少なエ犬種を増やすなら生まれた子同士を掛け合わせるのが一番安上がりで手つとり早エ」

嫌な話だ。入念に調べ上げた事実を述べながら胸が悪くなる。

「コヨーテ・ダドリーは全ての犬の敵だ」

「まともなブリーダーなら同じ犬種に高い種付け代を払うが、コヨーテ・ダドリーは無茶な繁殖をくりかえして『商品』を増やす。けどまア、濫造すりや比例して欠陥品も増

える」

「従わねえ犬は殺しちまうか精力剤まで使うつてんだから徹底してるぜ」

そんなふうに作り上げた『商品』は畸形や短命が多いのだが、コヨーテ・ダドリーの詐欺にぼられた自称愛犬家どもは大枚はたいて買い取つていく。

「成長したあとに障害がわかつても知らぬ存ぜぬでクーリングオフはきかねえときた」

「好き好んで畸形をオーダーするクズもいるつてんだから胸糞わりい」

とまあこんな具合に、ぼつたくられたアホな金持ちどもの恨みを買つたダドリーにや、もう一つおぞましい噂がある。コヨーテアグリーショーだ。